

## 令和3年度 第2回 県庁舎再整備検討委員会 結果概要

- 1 日 時 令和4年2月4日（金） 13:30～15:00
- 2 場 所 庁議室（出席者は原則オンラインで参加）
- 3 出 席 者 別紙「出席者名簿」のとおり
- 4 内 容 有識者の講演及び意見交換  
講師 こぼりてつお 小堀哲夫氏  
（建築家・法政大学デザイン工学部建築学科教授）
- 5 会議内容 別紙のとおり

## 令和3年度 第2回 県庁舎再整備検討委員会 結果概要

### 【内 容】

#### 有識者の講演及び意見交換

#### ■ 講師の講演概要 ～これからの時代に求められる新しい庁舎～

##### ○ 「リアルに会うことの大切さ」

- ・ デジタル技術が進む中でも、今後、新しい価値を創出する場、未来を創造する場として、リアルに会える空間の必要性が増してくる。
- ・ あの場所に行かないと出会えない人がいる、あの場所に行けば魅力的なプロジェクトがある、自宅にいたままで欲しいものが手に入り、仕事が完結し、地球の裏側の人とも交流できる時代にわざわざ出かけていく価値がある場所
- ・ 組織や階層、個人の活動に基づいたワークプレイスではなく、PBW（Project Based Working）（＝プロジェクトに応じて集まるワークプレイス）を踏まえて、プロジェクトに応じて個室を移動したり連結したり、自由に空間を組み替えられる場所が必要。

##### ○ 「地球と共生する」

- ・ 光や風など自然の恵みをうまく取り入れて、その土地の風土、特性を活かすことが必要。
- ・ 今までは機械が空調管理をしていたが、これからは個々のワーカーが最適な環境をつくれるようにする。自宅にいるように、一人一人が快適に働ける環境をつくり、自然を感じることでストレス軽減や集中力向上につながる。
- ・ 人口増加や資源の限界を踏まえると、サーキュラーエコノミー（循環型経済）への移行は必須。欧州では既にビジネスとして成立している。
- ・ 例えば、オランダのABNアムロ銀行のオフィスは、サーキュラー建築の先駆けとして、建物のほとんどがリサイクル材またはリユース可能な材で建てられている。

##### ○ 「新しいシンボル性」

- ・ これまではそれぞれの施設ごとに単一のサービスを提供（学校＝教育、図書館＝教材、庁舎＝行政業務・住民サービスなど）していたが、DXによりそれぞれが重なり、つながり、新しい可能性が生まれてくる。
- ・ かつては展望台やランドマークといった考えがシンボルであったが、これからは、例えば多様な働き方など、カタチだけではない、そこで起きている活動や新しい公共性の在り方がシンボルになるのではないかな。
- ・ 庁舎はスマホのように、ハード（施設）だけではなく、バージョンアップできるOS（組織機能）とアプリ（具体的な取組内容）を考えることが重要。

##### ○ 「これからの庁舎のポイント」

- ・ レイアウト変更や将来の機能転換にフレキシブルに適応できる執務空間、住民

など関係者が自由に待ち時間を過ごせる場、集中、打合せ、気分転換等状況に応じて働ける場などが求められる。また、住民と職員の協働の場となる空間や、自然を感じつつ待合や仕事が可能な外部テラスも重要。

- ・住民にとってはもちろん、そこで働く職員にとって健康的で気持ちの良い場所であることが求められる。職員満足度が高まれば、サービスの質も向上する。
- ・DXにより、これからの庁舎は「いつでもどこでもだれとでもつながる」ものとなる。住民の居場所も様々に、職員は仕事のモードに合わせて場所を選べるような新しい発見や出会いのある庁舎が求められてくる。
- ・フレキシブルに使える執務空間、職員のモードチェンジの場などがこれからの庁舎を構成するキーワードとなる。さらに、これからは自分自身の人生から働き方を見つめ直すLBW (Life Based Working) という観点も重要となる。

## ■ 意見交換の内容

(参加者)

新しいシンボル性や職員にとって健康的で気持ちの良い場所という視点は、優秀な人材の確保の面からも重要なことだと考えている。

(参加者)

地下鉄の会社運営や病院の建設に関わった経験があり、役員室を地域に開放してカルチャー教室のスペースにしたり、いかに患者が前向きな気持ちで病院に来てもらえるか、導線やデザインに気を遣って建設したことを思い出した。県民、職員それぞれが気持ちが良い空間で、更にプラスアルファな活動ができる空間にした方がよいのではないかというお話で大変参考になった。

(講師)

今、病棟の話があったが、例えば、服装をラフにするとかスニーカーで来るとか、建築の話ではないけれども、OSとかアプリの視点で考えてみるのもおもしろいと思う。

(参加者)

サーキュラーエコノミーの具体例としてのオランダの銀行の話など、大変参考になった。昔の古民家などを考えると、日本がもともと得意とするところではないかと感じた。

また、開放的な空間で満足度が上がるのはわかるが、このような建物は見る限りガラスで熱効率が悪く感じるが、断熱はどのようになっているのか。

(講師)

かつては、間違いなく日本はサステナブル国家であり、サーキュラー側のビジネスがあった。現在はビジネスとして成り立っていないが、欧米ではビジネスとなっており、危機感を持って見直す必要があるのではないか。

エネルギー利用の観点から光を入れると熱負荷が生じるが、石油を使って空調で冷やすのではなく、それをカバーするのに自然を用いるのが本当の意味での環境建築である。全て自然と自然でバランスを取っているのが地球であり、それをもう1度考えることが大事である。

日本には四季があり、その土地柄を考慮することが重要である。近代建築では全てに同じスタイルを提供するが、それより前は地域の気候風土に合わせて建物を造っていた。国際的な技術を用いて、もう一度ローカルな視点で考えるとよいと思う。

(参加者)

オンラインで仕事ができたり、県の権限が市町村へと移管されたりしている現状で、県民がどのくらい県庁に来るのか私の周囲でも確認してみたが、業務として県庁に行った人はいなかった。県庁が居場所であることはすごく大事だと思うが、県庁の周囲に住んでいる人達だけの居場所となっていて、そのほかの県民にとって県庁は遠い存在になっていると感じる。県庁の役割は地元に着している市町村の役割とは違うと思うが、どのように考えたらよいのか。

(講師)

非常に難しい質問であるが、その場所に強いコンテンツ、アプリケーションがないと人は集まらない。どういう人に会えて、どういう経験ができるのか、新しいコンテンツが重要になってくるんだと思う。

例えば、ハーグ庁舎は1階が巨大なフードコート、市民キッチンのようになっていて、食を通じて人を集めるようになっている。そのような例から考えると、行政の建物は音楽ホール、地域交流センターなどの機能とくっついて複合化し、場をシェアするようになっていくのではないかと。スーパーインポーズ的な考え方で、あらゆる機能が庁舎に入り込んだハードになっていくと思う。そうすると、新しい運営方法を考えていかないといけない。

(参加者)

私の部では、芸術劇場や武道館など様々な屋内施設を管理しており、機能の融合やスーパーインポーズという話を聞かせていただいた。私もiPhoneを使っているが、ハード、OS、アプリの話と、大変わかりやすかった。県庁の役割や機能の話もあったが、例えば施設を複合化するときに、これとこれとの食べ合わせはだめだとか、こういう視点を持ったほうがいいのか、それは建築主が考えることなのかなどについて御意見を伺いたい。

(講師)

それを我々はOSと呼んでいるが、どういうOSを埼玉県が採用するかとても難しい判断になる。シンボル性にも関係してくる。

どういう考えでOSを構築するかが非常に重要である。我々がよくやるのは、

設計段階で建築の空間を考えながら伴走してOSを一緒に考える。そして、建設段階で実証実験をし、運用して失敗したらフィードバックし、一緒にワークショップを行うなどして、最終的に運用するときには行政主導で自らやっていける体制にしていけないといけない。

また、全員がスキルを磨く必要がある。これからは仕事を自分で作るクリエイティビティがないといけない。スキルをもう1度学びなおす。リ・スキリングが大事になってくる。それがOSのバージョンアップになる。完璧なものは大事だが、間違ってもしょうがないくらいの気持ちで社会実験を繰り返していける文化を県庁から発信すれば、挑戦していいんだという場になっていくと思う。そうすると色々な人が集まって、サポーターが増え、新しい街の発展になっていくというイメージを持っている。学びなおすことは非常に重要なコンテンツになるし、リ・スキリングを繰り返していくことが重要。そういう場になるのが庁舎の役割だと考える。

(参加者)

県庁舎の適正規模について伺いたい。これまでは国の考え方に従い、人数や職位に応じて機械的に算定できた。お話を伺い、箱ものの規模はOSやアプリの違いによって変わってくると強く感じた。先を見据えてOSやアプリを考えるのは難しい。そもそも、適正規模の考え方はあるのか。

(講師)

OSやアプリはハードではないのでどんどん毎年変えていけばいい。ハードがどのくらいの容量かを検討する際は、埼玉県はどういうコンテンツを持つのかという議論から始めるべきである。

大手民間企業はテナントオフィスを解約している。こういう企業は出勤率が5割くらいで、オフィスのスペースも5割減にできると思われる。しかし、私は、これまでのオフィスは基準に沿ってきちりにつくられすぎていたので、モードチェンジスペースなど、これまでの働き方以外の働き方ができる場所、新しいイノベーションに繋がるような場所をつくる必要があると思う。

オフィスの規模が5割削減になっても、その5割でそういう場所をつくる。規模感としては、執務スペースは減少するだろうが、それ以外の付加価値を生み出す場所をつくるとなると規模はそれほど変わらないと思う。どういうOSにするのかよく議論をして設定していく必要があるのだと思う。

(以上)

## 令和3年度第2回 県庁舎再整備検討委員会出席者名簿

### ● 委員

役職名	氏名	備考
副知事	高柳 三郎	委員長
総務部長	小野寺 亘	副委員長
知事室長	小島 康雄	
企画財政部長	堀光 敦史	
県民生活部長	真砂 和敏	
危機管理防災部長	安藤 宏 (代理出席：副部長 澁澤 陽平)	
環境部長	小池 要子	
福祉部長	山崎 達也	
保健医療部長	関本 建二	
産業労働部長	板東 博之	
農林部長	強瀬 道男	
県土整備部長	北田 健夫	
都市整備部長	村田 暁俊	
会計管理者	宍戸 佳子 (代理出席：出納総務課長 横内 ゆり)	

### ● 設置要綱別表2の組織からの推薦者

組織名	職名・氏名
県議会	埼玉県議会議員 本木 茂
企業局	公営企業管理者 北島 通次
下水道局	下水道事業管理者 今成 貞昭
教育局	教育長 高田 直芳
警察本部	警察本部長 原 和也 (代理出席：参事官兼警務課長 三浦 孝一)
監査事務局	監査事務局長 矢島 謙司
人事委員会事務局	人事委員会事務局長 阿部 隆
労働委員会事務局	労働委員会事務局長 新里 英男